

---

## 弟以上恋人未満（みーちゃんと悟の場合）

alice

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

弟以上恋人未満（みーちゃんと悟の場合）

### 【Nコード】

N2203Z

### 【作者名】

alice

### 【あらすじ】

『ときの流れの中で…』のスピン・オフ作品第一弾、「みーちゃんと悟の場合」です。

高校に入学して始めてできた友達は凜とミコ。

そしてそんな凜の弟の悟君とみーちゃんとの出会いです。

## 第一話 出会いは友達の弟

『ときの流れの中で…』のスピン・オフ作品第一弾、「みーちゃん」と悟の場合」です。

アタシは佐倉 美由紀。

この春、ずっと憧れていた青葉学院高等部に入学することができた。中学時代はなぜか勉強ができてしまったからクラス委員なんてものを何回も押し付けられたりしていた。

じつはウチの母親は日本人とイギリス人のハーフなんで、アタシはクォーター（1/4）ってことになる。

そしてウチの母親の母親、つまりアタシの母方のおばあちゃんというのがイギリス人なんだけど、彼女はお父さんが日本の大学の先生だったもんで小さいときからずっと日本で育ち、近所の男の子たちと街中を駆け回って遊び狂い、そのため英語というものをほとんど忘れてしまったらしい。

しかも住んでいたのは浅草なもんだからもう完全なبرانમે工的江戸っ子気質。女の子なのに祭と花火が生きがいだったそうだ。そんなおばあちゃんに育てられたアタシの母親も完全な江戸っ子になつてしまい、笑えない話だけど、ウチの母親は学生時代は英語が大の苦手な英語を話している外人を見ると同じような顔をしている自分に話しかけられないようにすーっと避けて通っていたらしい。大学入学は推薦だったらしいけど、英語の成績の悪さを国語と数学でカバーしていたっていうんだから大したもんだ。そして何を考えているのかわかんないけど、私の母親は白人を見るとすべてアメリカ人だと思っ込んでいる。

中学校の半ばまで英語の英がイギリスを意味しているということを知らず、アメリカ発祥の言語だと思い込んでいたというから呆れてものも言えない。

しかし、さすがにアタシが生まれたとき、イギリスにいるおばあちゃんやんの親戚たちもこれではまずいと思ったのか、来日したときはアタシに英語で話しかけるなどをしていらしい。

そのためかアタシは幸いにも英語に拒絶心をもつことがなくあくまで勉強としてだけど小学生の時には日常会話くらいは話せるようになった。

そんなアタシに周りの人たちは、勉強ができてクオーターなんて先入観があるとやっかいな幻想を抱く。そしてその幻想はアタシにとつてかなり迷惑なものだった。

「みーちゃんってお人形さんみたいなキレイな顔してるねー。」

「頭もいいし非の打ち所がない娘だ。」

「いつもニコニコと明るくてキミはクラスの華だヨ。」

そんなことを1年生のときからずっと言われ続けてきたけど、そんなのちつとも嬉しくない。

アタシはもつともつと何でも話せてバカやれる友達がほしかったんだヨ！

でもイメージっていうのはホントに恐ろしいもんで、一度作られちゃったら簡単には壊してはくれない。

そのおかげでアタシの周りにいるのは参考書をマンガのように楽しく読める奇人変人ばかり。

だから中学を卒業とき、高校に入学したら絶対アタシのイメージを

変えてやるーっ！  
ホントのアタシの正直な気持で付き合える友達に囲まれて面白おかしい高校生活送ってやるぞーっ！  
って思ってた。

そして入学式の日であったのがこの2人だった。

## 入学式の日

ウチの中学から青葉学院に受験したのは3人だったけど合格したのはアタシ一人だった。

これはアタシにとってじつにラッキーなことで、中学時代のイメージ破壊には絶好のチャンスだ。

「さあー、友達百人作るぞー！」

そう思って初めての教室に飛び込んだアタシだったが、周りを見ると当然知らない人ばかりで話す切っ掛けもみつからない。

中には附属の中等部から内部進学してきている人たちも何人かいるらしく、そういう人たちはすでにまとまって楽しそうに話している。

そのとき少し離れた向こう側でアタシの方に手を振ってくれる女の子を発見！

（あ、あの娘、友達になってくれるかも。）

アタシは手を振ってそれに応え、そしてウキウキと小走りでその娘

の方に近づいていくと

すっ……………

とその娘はアタシを通り越して反対側へ

「あー、優ちゃん。同じクラスになれたんだねー！」

と後ろの方で別の娘がその娘と抱き合って喜ぶ姿を見てしまう。

「ちっ、なんでー。 やっぱり中等部組かあー。」

そんなことを心の中で呟きながら、とにかく空いている席に腰を降ろした。

フツと隣の席を見ると女の子が2人、やっぱり楽しそうに話をして  
いる。

(あーあ、どうせこの娘たちも内部組なんだろうな…。)

一人はセミロングにふんわりとした感じのカールをかけた髪、笑っている感じがすごくフェミニンで可愛い娘だった。もう一人は少し長めのポプカットにハッキリした目鼻をしていて美形タイプの女の子。

小さい頃から「お人形さんみたい」なんて言われてきたアタシだけ  
ど、お人形さんなんてもんは結局心がないものだからいくらキレイ  
でも魅力なんかあるわけじゃないのさ。

ああ、この娘たちってなんかすごくキラキラして可愛いなあ…。

アタシがもし男に生まれていたら、きつとこういう娘と付き合いた  
いって思うんだろうなあ。

もしアタシが男で、高校入学の日にこの娘と運命的な出会いをしたとする。

そしていつの間にか惹かれあってしまう2人…。

放課後

アタシはあのカールの娘と偶然帰り道が一緒に

「送るよ。」

「…アリガト。」

フツと気がついたらあのカールの娘とアタシは夕暮れのキャンパスの隅で…。

わぁーっ！

違うっ！っ！のっ！

アタシは女じゃん！

そんな気ないよぉーっ！

そんな妄想を頭にめぐらしていると、そのうちの一人のふんわりした感じの娘とパツチリ目が合ってしまった。

（ど、どうしよう…。目を逸らそうか。いや、ダメ！美由紀、これがチャンスだと思って声をかけちゃえ！とにかく誰かと友達になっ取っ掛かり作らないと！）

「は、はじめまして。」

アタシはドキドキする鼓動を抑えながらなんとか声を絞り出した。

「あ、はじめまして」

（やったー！初めて会話が成立したー！）

「なんか仲良さそうに話してたけど、2人は中等部から？」  
「ううん。2人も同じ中学出身なの。」

（そ、そうだったんだ。じゃあ、アタシと同じ外部組じゃん。やったっ！ やつと狙った獲物をみつけたぞおー！）

お互いの自己紹介をする

ふんわりした感じのフェミニンガールが小谷 凜ちゃん。

そしてハッキリタイプの美人さんが藤本 美子ちゃんというらしい。

「アタシは藤本 美子です。でも中学のときまでずっとミコって呼ばれてたから。」

「ヨロシクね。あたしはみーって呼ばれてた。」

「じゃあ、ミコと凜とみーちゃんていいよネ？」

やったぞおー！

その日のうちにあだ名で呼び合える友達をゲット！

こうしてできた高校生活最初の友達がこれからのアタシの人生を大きく左右することになるとはこのとき微塵も考えられなかった。

彼女たちとの付き合いが始まってみると、この2人の関係ってというのがじつに面白いついていうか興味深いものだった。2人もぜんぜんタイプが違うのに、よくこんなに仲がよく付き合えるものだと不思議に感じる。凜はどっちかというと自分の感情に素直なまっすぐタイプ。それに対してミコは緻密に物事を考えて行動する作戦タイプの娘に思えた。

そしてそんな彼女たちに混ざっていると、そこには飾らない姿で楽しんでしまえるアタシがいた。

入学式が終わって1ヶ月ほどしたある日の土曜日

「ねえ、みーちゃん。今日よかつたらウチに遊びに来ない？ ミコモ一緒だよ。」

フェミニンタイプの凜からそう誘われた。

中学時代に友達の家に行くことはあっても、みんなガリ勉ちゃんばかりだったので、家ですることといえば勉強だけ。遊びに行くんじゃない勉強するだけなのだ。

勉強の合間に話しかけても迷惑そうな顔されるだけ。

「だったら誘うんじゃねーヨ！」  
と言いたくなってしまふ。

ようはお互いどれだけ日頃勉強してるか偵察ついでに一緒に勉強しようってことなんだろう。

ところがこの2人といると勉強のべの字も会話に出てこない。そうなるとアタシも段々と本性が出てきてしまってもんだ。

まあ、いくら友達の家といっても初めて行くわけなので、アタシは途中のケーキ屋でケーキを6つばかり適当に見繕って買った。

彼女の家は想像したよりもかなり大きく、話を聞くとお父さんがスーパーマーケットやコンビニを経営している社長さんらしい。そういえば凜はやっぱりお嬢様タイプに見える。

「あら、まあ。お人形さんみたいに可愛い人ねえ！」

凜のお母さんはアタシを見てやっぱりこう言った。

フッフッフ…。

お人形さんの外見なんて楽しい高校生活の前には無関係ヨ！

そのうちこのお母さんもアタシの真の姿を知ることになるだろう。

そして家に入るとダイニングでお母さんがお茶を入れて、アタシの買ってきたケーキをお皿に分けて出してくれた。

そのとき

「あー！ー！ケーキだ！ いいなあー！」

と言って顔を覗かせた男の子。

「悟、お姉ちゃんの友達来てるんだからアツチ行つてて！」

凜はその男の子にそう言っただけで追い払おうとする。

しかしその男の子はそんな凜の言葉なんかお構いなしにこっちに寄ってきた。

「あ、ミコちゃん。ひさしぶり。」

「悟、元気だった？」

この男の子はいつもミコのことを良く知っているらしい。

あ、そっか…。

考えて見れば凜とミコは中学からの友達なんだもんね。

でも…。

この子ってかわいい…。

なんかこの子を見るとすごく切なくなるような。

「弟さん？」

「ウン。悟って行って今年中1になったの。」

あ、そつか。

アタシたちより3歳年下なんだ。

ってことは…

もし小学校のとき死んじゃったアタシの弟の修が生きてればおない年なんだ…。

そんなことを考えていたとき

「あ、凜ちゃん。チョコケーキだあー！ いいなあー！」

と悟君が凜の前に置かれたチョコケーキを指差して叫んだ。

「悟君、チョコケーキ好きなの？」

アタシは彼に尋ねた。

「ウン、大好き。チョコがいっぱいかかっているのが一番好きなんだ。」

アタシは凜の前に置かれたそのチョコケーキのお皿をさつと取り上げて

「ハイ、悟君。ドーズ。」と差し出した。

凜は「エ！？」という顔をする。

「アンタ、お姉ちゃんなんだから我慢しなさい！」  
アタシは凜に向かってこう言った。

「あーん、アタシのチョコケーキ！ アタシもすきなのにー」  
泣く

こう言っただけは物欲しそうな顔をするがそんなのお構いなし！  
ミコはそれを見てゲラゲラと笑っている。

「これ、ボクがもらっちゃっていいの？」  
悟君は嬉しそうな顔でアタシに尋ねる。

「もちろん！悟君のために買って来たんだからー。」  
あたしがそう言っ

「うっそだー。みーちゃん、今初めて悟と会ったんじゃない！」  
凜があくまで抵抗するけど、そんなのアタシはぜんぜん無視！無視！

じつはそのときアタシは悟君のそんな嬉しそうな笑顔に吸い込まれ  
てしまう自分を感じていたんだ。

## 第二話 チョコケーキ

その日

アタシは家に帰ると、頭の中に思い浮かんでくるのはなぜか凛の弟の悟君のことばかりだった。

(3歳も年下の子だよ。)

なんていうんだろっ…。

なんかカレと話していると心の中を触られているような。

それは『かわいい』って感情なんだろうか。

それとも…。

そんなことを考えながら、さっきから自分の部屋の机に向かって座ってボーっとしている。

すると

コンコン

部屋のドアをノックする音

「みーちゃん、お父さんがケーキをお土産に買ってきてくれたけどどうするっ…」

母親がドアの向こうからアタシにそう尋ねた。

「あ、ウン。今、下に降りてくから。」

階段を降りてダイニングに入ると、ちょうど父親がスーツの上着を

脱いでネクタイを外しているところだった。

「あ、お父さん。おかえりなさい。」

「おー、キャサリン！ ただいまー。」

父親はアタシの顔を見るなり大袈裟なポーズでそう応えた。

「お父さん、そのキャサリンっていうのやめてヨ。第一アタシはクォーターで純日本国籍なんだから、ミドルネームなんか持ってないんだヨ！」

「いいじゃないか？ オマエ、それで青のカラーコンタクトでもすれば立派にイギリス人で通るぞ。」

「アタシはコツテコテの日本人！ キャサリンなんて名前じゃなくて美由紀だって何度言えばわかるのヨ！」

じつはウチの父親は外務省に勤めてるんだけど、母親と真逆でとにかく欧米かぶれだった。

そのためアタシに元々ありもしない勝手なミドルネームをつけて呼んだりする。

ただし出身は埼玉県の所沢で父方の家は代々造り酒屋。

欧米なんかウチの父親の出自には縁もゆかりもない。

しかもこの父親、ときどきとんでもない発想を持ってしまい、母親がアタシを産むときアメリカの病院に行かせようとしたらしい。

アメリカは出生地主義なので、日本人と日本人の間に生まれた子でもアメリカ国内で生まれればアメリカの市民権を持つことができる。それでアタシにキャサリンなんていう奇妙なミドルネームをつけようと思っただけらしい。

しかし江戸っ子万歳の母親はこれに強硬に抵抗した。

日本人とイギリス人のハーフの母親は純日本人の父親に

「せっかく日本人に生まれたのにアメリカの市民権なんていらー  
ーん！」

と一喝したそうだ。

そんなわけで、アタシはハーフのくせに江戸っ子気質の母親と埼玉出身なのに西洋かぶれの父親というチョット変わった環境の中で生まれ変わった。

アタシには以前弟がいた。

修しゅうといつて、アタシの三歳年下。

少し年は離れていたけど、アタシたちはいつも一緒によく遊んでいた。

それがアタシが小4のときのある日、

修は友達と近所の公園で遊んだ帰り道に信号無視をして突っ込んできた車に轢かれて亡くなった。

しかもその犯人は修を轢いた後そのまま逃げてしまった。

ただ夕方の出来事で目撃者が何人もいたのと、そのうちの何人かがナンバーを覚えていたことから犯人は数日後あっさりと掴まった。

驚いたことに犯人はまだ21歳の大学生だった。

彼はその日デートの帰り道で、自分の彼女を家まで送ったあと近道をするために公園の前を通る細い道路に入って来た。

そして運転中疲れていたときちょうど修のところの信号が黄色信号

から赤に変わったが、ついアクセルを踏んでスピードを上げそれを突っ切るうとしたらしい。

もつと驚いたのはその彼が逮捕されたあとの態度だった。

彼は修の方が信号を無視して渡ってきたと主張した。

しかしこれは周りに居た複数の目撃者の人たちの一致した主張で彼の信号無視は明らかだった。

するとその彼は今度は「すでに企業への就職が決まっているからどうが見逃してほしい。」と言い始めた。しかもそれを彼だけでなく彼の両親も言っていたそうだ。

ウチの両親はそのあまりの身勝手さに絶句したらしい。

結局その大学生は大学を4年生のときに除籍処分になって刑務所へと入ったそうだ。

ただウチの両親はその彼の将来のことも考えて、民事の賠償金についてはかなり減額してあげたらしい。そしてそれを一度に払わなくてもいいから、彼が出所後キッチンとした仕事に就いたら毎月その中から8万円を送付すること。これを定年になるまで続けて欲しいと言った。

8万円というのは微妙な金額で、20代にとってはけっこう大きなお金だけど、40代くらいになれば節約すればある程度は削れる金額だ。

アタシの両親はそうすることによって自分の犯した罪を一生忘れないうでいて欲しい、そしてもう二度とこのような過ちを犯さないようになって欲しいとの願いからだった。

それから6年

その彼も今は出所してちゃんとお勤めをしているらしい。

ウチの両親の温情はそれまで身勝手だった彼の心にも相当響いたらしく、毎月お給料日から3日以内に銀行振り込みではなく現金書留

で送ってくる。

そしてその封筒の中には必ず

今の自分の気持とかを書いた手紙が添えられていた。

じつはその彼には内緒にしているらしいが、ウチの父親は彼の勤める会社の社長に彼を色眼鏡で見ず公平に扱ってあげて欲しいとお願いでいるらしい。

説明が長くなっただけど、そんなわけで今この家ではアタシは長女でしかも一人っ子のわけだ。

そういえば、修もチョコケーキが好きだったなあ…。

小さい頃アタシがあの子の誕生日にお小遣いを貯めてチョコがたっくんかかったプチデコレーションケーキ買ってきてやったことがあったけど、あの子ものすごい喜んでそれを頬張ってたっけ。

そして

アタシはそれからけっこう頻繁に凧の家に遊びに行くようになった。

彼女の家に行くときはいつも家の近くの評判の店でケーキを6つ買っていく。

そのうちのひとつは悟君のためのチョコクリームがたっぷりかかった生チョコケーキ。

しかし、3回目に彼女の家に遊びに行ったときには、彼女のお母さんはアタシにこう言った。

「みーちゃん。ウチに遊びに来るのにそんなに気を使わなくつていいのヨ。高校生なんだからお小遣いだってそんなにあるわけじゃないんだから。手ぶらで遊びに来てくれればアタシだって嬉しいからね。」

(ああ、凜のお母さんってすごく優しいんだな) っ  
って思った。

でもアタシは悟君が喜ぶ顔をどうしても見たいわけで。

だからアタシはカレの分だけを買って行き、凜にこっそり渡して冷蔵庫に入れておいてもらったりした。

ただ、悟君ももう中1のわけで、異性というのを意識できる年齢だろう。

しかも3歳も年上のアタシがこうしてしまうことがカレの気持の中で迷惑になっていないだろうかという心配はいつもあった。

だからアタシがあげているケーキを本当に悟君が喜んで食べてくれているのか、それを凜に聞きたくてもさすがに聞けない。

ある日

チア部の連絡事項を伝えるために凜の家に電話したとき、たまたま悟君がその電話を取った。

そのとき

「みーちゃん、この前買ってきてくれたケーキすごく美味かった！。アリガトね。」

とカレが素直に喜んでくれている言葉を聞いたときはアタシ本当に嬉しかったんだあ。

「よかったあー。じゃあ、みーちゃん今度はもっと美味しいチョコケーキ買ってきてあげる。」

「わぁーい！ ホント!?!」

「ウン！ ホントさぁー。新宿にね、すごく有名なお店があるの。今度遊びに行くときはそれを悟君に買って行ってあげるから。」

「やったぁー！ みーちゃん、だいすき！」

「ホント？ うれしいー！ アタシも悟君だーいすき！」

アタシは何のために電話したのかも忘れて、カレの嬉しそうな声にこんなにはしゃいでしまうんだ。

### 第三話 それは嫉妬？

アタシが高校2年になったところには、アタシはカレを悟と呼び、そしてカレはアタシをみー姉ちゃんと呼ぶようになっていた。

凜は

「なんでホント姉のアタシが凜ちゃんでミコがミコちゃんなのにみーちゃんだけみー姉ちゃんって呼ぶの？」

なんて悟に言ったらしいけど、悟にもよくわからないらしい。でも悟がアタシのことを頼りにしてくれるのはすごく嬉しい。

それでもアタシがカレと会えるのは、凜の家に遊びに行ったときだけ。

それも凜やミコと一緒にいるわけだからカレとばかり話すわけにもいかない。

そんなわけで、なんと友達の弟に強烈なブラコンを持ってしまったアタシなんだけど、そんなアタシも男の人から告白をされたりしたことがあった。

それはちょうど高2の終わりごろのことだった。

相手は同じクラスの田所君。

彼はバスケット部に入っていて身長が高くけっこう女子に人気がある人だった。

アタシはそれまで彼を意識したことはぜんぜんなかったんだけど、その年の文化祭でたまたま同じ実行委員になって放課後の行動を一

緒にすることが多くなった。

そして実行委員の打ち合わせがかなり遅くなったときには渋谷駅まで一緒に帰ったりしたこともあった。

そうしたある日

やはり委員会で遅くなって田所君と一緒に渋谷駅に向かって歩いていったとき彼はアタシにこんなことを聞いてきた。

「ネエ、佐倉さん…。」

「ウン、なあに？」

「今度の日曜日って何か予定あったりする？」

「今のところはないけど。」

「じゃあさ、もし良かったら一緒に映画見に行かない？ じつはずっと楽しみにした映画があるんだけど、一人で行くのも面白くないしな。」

これがいわゆるデートのお誘いだっていうことくらいは、いくら彼氏いない歴〓実際年齢のアタシにだってわかる。でもアタシは今まで彼がアタシにそんな誘いをするなんて考えたこともなかった。そして何か心にひっかかるものがある気がしてしょうがない。

「ウー…。」

悩む、悩むアタシ。

「そんなに…悩むほどのことかな？」

田所君はチョット寂しそうにそう言った。

「もし迷惑なら断ってくれていいんだし、ただ一緒に遊びに行けたらって思っただけだから。」

そうか。

アタシって考えすぎなのかも。  
別に付き合ってくれって言われてるわけじゃない。  
ただ一緒に遊びに行こうって言われてるだけなんだから。  
もっと気軽に考えていいんだよね。

「ゴメン。いいヨ。映画一緒に行こう。」  
アタシはニコツと笑って彼にそう言った。

そして田所君との約束の日の前日の土曜日の夜  
アタシが自分の部屋で本を読んでいると

ピロロロロ……..  
とアタシの携帯電話が鳴る音が

(誰だろう?)

ベッドの横に置いた携帯を取り上げ着信表示を見ると

『SATORU』

(あ、悟からだぁー)

「もしもし悟?」

「あ、みー姉ちゃん? オレ。」

「ウン。どうしたの? ちょっとビックリしたー。」

「あのさぁ、明日ってみー姉ちゃん何か用事ある?」

「エ、明日?」

「ウン、そう。」

「ゴメン。明日はアタシちょっと。」

「そっかぁ……。」

「悟、何かあったの？」

「ウウン……。じゃあ、いいや。夜遅くゴメンね。」

「エ、あ……。」

アタシから尋ねる間もなく、そう言って悟はそのまま電話を切ってしまった。

（なんだろう……。）

（せっかく悟が電話をくれたのに。）

そして次の日

約束の時間の少し前

アタシは田所君と待ち合わせした渋谷センター街の入口に向かうとすでに彼はその場所に来て待っていてくれた。

（へえ、時間にしっかりしているんだ。）

こういうことは好印象だ。

たとえ相手が男でも女同士であっても、約束した時間に平気で遅れてきて、しかも悪びれたそぶりも見せない人を見るとホントにムカツク。

たとえば、もし、もしもヨ？

アタシと彼が付き合うようなことになったとして、いつも男の人の方が先に来ていなくてもいいと思うんだ。お互い早く顔を見たいって気持ちが出てくればアタシも彼より早く来てしまっかもしれないし。

そんなことを考えながらアタシは彼に近づいていく。

彼はアタシに気付くとニコツと笑い手をあげた。

「オハヨー。」

「オハヨー。ゴメンね。待った？」

「いや、オレ早く来すぎちゃったんだ。」

「どれくらい前から待ってくれてたの？」

「エツト、30分くらい前かな。」

「エー！ 30分も前から！？」

アタシは思わず噴出してしまった。

「クスクスクス……。」

そして、そんなアタシを見て彼は照れくさそうに笑っている。

そのとき思った正直な印象は

「へえ、男の人ってこんなふうにも笑うんだ？  
ってこと。」

だって、彼氏いない歴〓 実際年齢のアタシにとってこんなふう  
に笑う男の人の顔を見たのは初めてだったもん。

「じゃあ、少し早いけど行こうか？」

「ウン！」

アタシたちはセンター街からほどない距離にあるシネマホールに向  
かった。

映画館の前に着くと、そこにはすでにけっこう長蛇の列ができてい  
た。

「わあ、すごい人気だねえ！」

アタシが驚いたような声をあげると

「ホントだなー。あ、チヨット待ってて？」  
と彼は言って券売コーナーのほうへ小走りに走っていった。

少しして戻ってくると小さく息を切らせて

「ゴメン。この回の指定席券はもう売れきれちゃったそうなんだ。  
でもこれじゃ座れてもかなり後ろのほうの席になっちゃいうそうだな。」

「いいヨ。後ろの席だって、もし座れなかったら立って見たっていいんだし。」

「エ、でもそれじゃ佐倉さん疲れちゃうだろ？」

「それだけ面白そうな映画だったことなんだから少しくらい疲れたって気にならないヨ。ネ？」

「そっか。ならよかったー。」

「田所君、アタシに気を使いすぎだヨ（笑）」

「あ、そっかナ？（笑）」

ホールに入るとやっぱり後ろのほうだったけどアタシたちは上手く席に座ることができた。

「席とれてよかったネー。」

アタシはそう言いながら自分のバッグからメガネを取り出した。

「あれ、佐倉さんってメガネしてたっけ？」

「あ、普段はかけてないの。遠いところ見るときだけ少しぼやけるから。」

「そっか、だからかな。」

「エ、なにが？」

「ときどきメガネかける人って目がキレイだっていうから。」

「そ、そうかな…。」

男の人にそんなこと言われたのは初めてだった。

もちろんそんな風に言われればぜんぜん悪い気はそくないけどでも、なんていい返したらいいのかわからない。照れてしまう。

「あ、映画はじまるヨ。」

アタシは誤魔化すようにそう言って前を向く。

映画はけっこう面白かった。

TVでもかなり前から評判になっていたアメリカの有名俳優が演じるアクション物で、その結末はハラハラドキドキ最後まで目が離せなかった。

「あー、おもしろかったネー！」

見終わってもまだドキドキ感が少し残る。

「まだ時間も早いしさ。どっか喫茶店でも寄っていかない？」  
彼がアタシにそう誘った。

「あ、ウン。いいヨー。」

そう言っアタシたちが劇場を出ると、同じホールの隣の劇場では今大人気でヒットしている『映画怪物くん』の上映をしているらしかった。

（あ、そういえばこれって悟が前に話してたなあ。）

そのときちょうどこの劇場でも上映が終わったらしく、中から次々

とお客さんたちが出てきた。

すると

その中に

びっくりした！

悟の姿が

カレは友達らしき男の子と2人で劇場の中から出てきた。

「悟ー！」

カレはアタシの驚いた声にクルツと振り向く。

「エ、あー！みー姉ちゃん！」

「悟ー。びっくりしたあー。こんなところで会えるなんて思わなかったヨー。」

「ウン。友達と映画見に見たんだ。」

「そっかあ。悟、前にこの映画のこと話してたもんね。」

「みー姉ちゃんは？」

「あ、アタシはこっちのほうの映画。」

そう言っアタシは今まで見ていた映画のパネルを指差した。

「そうなんだ？ 凜ちゃんとかと一緒に？」

「あ、エツト…。」

アタシはなんて言ったらいいか躊躇った。

すると横にいた田所君は

「知り合いの子？」

とアタシに尋ねてきた。

「あ、ウン。凜の弟さんなの。」

「凜って、同じクラスの小谷さん？」

「ウン、そう。」

「そうなんだ。やあ、はじめまして。田所っていいます。」

彼はそう言っで悟に挨拶をした。

悟ははじめ少しキョトンとした顔をして、そしてその後急にムスツとした表情に変わって、田所君に何も言わずペコンと頭だけ下げた。

「みー姉ちゃんの彼氏？」

悟は不機嫌そうな表情でアタシにそう尋ねる。

「エ、ち、ちが…。」

”ちがうヨ！”

アタシはそう否定しようとしたとき

急に横にいた田所君が

「まだ、わかんない。そうなるかもしれないな。」

と悟るに言ってしまった。

「チヨ、チヨット！」

アタシは怒ったように田所君の方を向く。

「ふうん、そう…。」

「エ、あの、悟…。」

「じゃあ、ボクこの後友達と用事があるから。」  
そしてプイッとした顔をした悟はその友達とスタスタと出口の方に歩いて行ってしまった。

「チヨ、待って？ 悟ー。」

アタシはそう声を声をかけたけどカレはアタシの声に振り返ろうとはしなかった。

#### 第四話 友達の弟だって…

「オレ、なんかまずいこと言っちゃったかな…。」

「そんなことはないけど…。」

せっかく誘ってくれた田所君には悪いけど、アタシの気持は一気にドーンと落ち込んでしまった。

「ねえ、さっきの子は小谷さんの弟さんだって言ってたけど。」

「ウン、そうだよ。」

「今何歳くらいなんだろう？」

「アタシたちより3学年下だから今中2。」

「あ、3歳も下なんだ。でも、お姉さんの小谷さんにならわかるけど、佐倉さんはあくまでお姉さんの友達なんだから…。」

「ウン…。」

そして

周りに人が少なくなったとき田所君はアタシの方を向いてこう言った。

「あのさ、もし嫌じゃなかったら、今度オレと会つときから友達としてじゃなく彼氏として会ってくれないかな？」

「エ…。」

「ずっと君のことが好きだったんだ。文化祭の同じ実行委員になったのもキミがいたからなんだ。」

「あ、あの…。」

「今返事をくれとは言わないから、考えて返事してくれれば。」

「ウ、ウン…。」

そして

その日、田所君はアタシをそのまま渋谷駅まで送っていつてくれて分かれた。

家に帰っても今日あったことがアタシの頭の中をグルグルと渦を巻くようにまわっている。

田所君とは今までそれほど仲良く話すような関係じゃなかった。

でも今日一緒にいてしつかりとした感じの良い人だっていうことはよくわかった。

だからもしお付き合いをしたとしたらアタシは彼のことを好きになっってしまう可能性はあるかもしれない。

じゃあ悟は？

悟は友達である凜の弟。

しかも3歳も年下だ。

アタシが大学生になってもカレは高校生。

アタシが大学を卒業してもカレはまだ大学生。

それにいつかカレにも同じ年齢の彼女ができるかもしれない。

そうなったとき、アタシはやっぱりあくまでお姉さんの友達にすぎない。

こういうことを考えてしまうのはもしかしたら女のズルさなのかもしれないけど。

でも悟と話しているとき、アタシはホントに心の中が温かくなるの

を感じられる。  
アタシはいつもカレに何かをしてあげたいという気持ちでいっぱい  
自分をわかっている。

アタシは思い立って凧の携帯に電話をかけてみた。

「もしもし、凧？」

「みーちゃん？ どうしたの？」

「あ、今電話しててもだいじょうぶ？」

「ウン。 今部屋で本読んでいただけだから、いいヨ。」

「あのさあ、今日たまたま渋谷行ったら、悟に偶然会ったんだけど  
…。」

「エ、あー、そっかあ。」

凧は何か思い当たるような声をあげた。

「そっかあって？ なんかあったの？」

「あ、ウン。 じつはあの子昨日の晩に父親から映画の招待券2枚  
もらってさ。」

「エ、もしかしてその招待券って怪物くんの映画の？」

「ウン。 良く知ってるねー。 それでいつもみーちゃんにご馳走  
してもらってばっかりだから明日みーちゃんを映画に連れてってあ  
げようかなって言ってたんだヨ。」

「エエエツ！ そ、そうなの？」

「ウン。 でも、電話したらみーちゃんなんか用事あるみたいだから

って残念そうな顔してたの。　じゃあ、その後多分友達誘って行っただらうねー。」

（そ、そうだったんだ…。）

（ゴメン、悟。　せつかく誘ってくれようとしてくれたのに、アタシ…。）

アタシは

アタシにとって悟が友達の弟のままでもいい！

悟が、アタシが他の男の人と付き合うことを不愉快に感じるならアタシは悟の笑顔をこのままずっと見られているほうがいい。

決めた！

そしてアタシは次の日の放課後、  
大学キャンパスの隅にあるベンチで田所君と待ち合わせをした。

アタシは彼に、お付き合いという気持ちはあまり起きないことを正直に伝えた。

「もしかして昨日の小谷さんの弟さんとのこと？」

そう聞かれるだろうことはアタシも当然予想していた。

でもそこまでアタシの気持を話してしまうと、凜にも迷惑がかかってしまうかもしれないと思った。

「ウウン。あの子はあくまで友達の弟だから。可愛いとは思っけど、それ以上の感情はないヨ。」

きつと男の子とだったらこういいうときにウソはつけないんだろ。でも女はこういいうときは平気でウソがつけてしまうんだ。

「じつはアタシ、ずっと好きな人がいて…。」

「その人に佐倉さんの気持は伝えないの？」

「あ、その人はずっと付き合ってる彼女がいるから…。」

「そっかあ…。」

ゴメンね、田所君。

こないかにも少女マンガにありそうなウソついちゃって。さすがにアタシの心も少しチクチクする。

田所君と分かれアタシは、すぐに悟にメールを送る。

「悟、ゴメンね。怪物くんの映画、最初みー姉ちゃんのこと誘ってくれようとしたんだってね。昨日一緒にいた人は彼氏じゃありません。付き合う予定もありません。今度また悟の見たい映画があったらみー姉ちゃんのこと誘ってくださいネ。」

するとそれから10分もせず悟から返信メールが来た。

（あ、悟からだあー）

「じゃあ、今度ボクが誘ったときは一番優先してくれる？」

(アハ、かつわいいんだー)

「ウン！凜やミコに誘われても悟の約束を一番にするヨ。」  
そう書いてアタシはまたメールを送る。

「ウン。じゃあ、絶対だヨ？」

ゼツタイさあー！

## 第五話 ショック！悟がいなくなっちゃうの！？

高3のとき、アタシがなぜ芸能界に入ろうって思ったか。じつをいえば、それはアタシ自身でもよくかかっていない。

あのとき

スターダスト事務所の前田さんがアタシたち3人に芸能界を勧めたとき

凜とミコはその場でそれをスッパリと断った。

そしてアタシだけがその申し出を受け入れた。

それは今から思えばほとんど衝動的ともいえる返事の仕方だったと思う。

もしかしたら、前田さんもそれを感じていたのかもしれない。

前田さんはその後もう一度アタシの意思を確認するため、今度はアタシだけを事務所に呼んだ。

「まず君は現在高校生であること。これはとても大切なことだ。なぜなら高校生はまだ子供であり、我々はたとえ芸能プロダクションであっても大人という立場であること。だからまだ子供である君の人生を芸能活動に切り売りさせるようなことは絶対にしたくない。

わかるね？」

「ハ、ハイ。」

「できうる限り、芸能活動をすることによって君自身の人生が豊かになれるようにしたい。ただし、ここからが大切だ。時間というものはすべての人に平等に与えられているものだから、同じだけ与えられた時間の中で何かを得ようとすればそれによって犠牲になるこ

とも当然でてくる。例えば友人と遊び時間とか、一人でゆっくりする時間とか。私はそういうものは享受できる時期に享受しておかないと人生としてとてももったいないとも考えている。それでも君はそういうものを犠牲にして芸能活動をやる意志があるかということだ。」

前田さんはまっすぐアタシの方を向いて、そう確認した。

「あの、こんなのが応えになるかどうかわかりませんが、アタシは今まで自分のハッキリした夢って持ったことがなかったんです。小谷さんも藤本さんもそれぞれ夢があって、それがとても羨ましかったです。だからもし芸能界がアタシの夢になるなら、チャレンジしてみたいって…。」

「…なるほど。それじゃ、頑張れる意思はあるかな？」

「やります！絶対に頑張ります！」

こうしてアタシの芸能界入りは決まった。

このことを悟に話したとき、カレは正直あまりピンとはきていない様子だった。

ただ今まで身近な存在だったアタシが少し遠くへ行ってしまうかもということとは感じていたようだ。

そのことでカレは少しばかり不機嫌な顔をしていた。

アタシはデビュー前に凜の家に遊びに行ったとき、悟の部屋に行きカレと少し時間をとってそのことを話すことができた。

「芸能人になったら、みー姉ちゃんきつとこうやってウチにいつも遊びに来れなくなっちゃうね。」

カレはアタシの顔から目を逸らしてそう言った。

「ウン、少し減っちゃうかもしれないけど…。でも、アタシはずっと悟のお姉ちゃんの友達だし。悟にとってアタシはこれからもずっとみー姉ちゃんだから。」

「でも、芸能人ってたくさんファンがいて、そういう人たちみんなのものにならなくちゃいけないんでしょ？」

「そうだけど、でも、アタシにだってプライベートってあるんだから。だからアタシのプライベートはみんな悟にあげちゃう。」

「ホント？」

「ウン、ホントのホントさあー。だからこれからもみー姉ちゃんのこと慕ってくれる？」

「ウン！」

傍から見れば、本当の姉弟でもないのにこんな会話ってチヨットヘンなのかもしれない。

でも、アタシにとって悟は何よりも大切な存在になってしまっていた。

ただそれがどう大切なのかはわからない。

男と女としてなのか、それとも死んでしまった修の面影だったのか。でも、不思議とアタシ自身の気持では悟と修がダブることはなかった。

芸能活動が忙しくなってきたアタシが段々学校に通えなくなってきたとき、アタシは真剣に転校を考えざるをえなくなっていた。

そのときマネージャーだった男の人はアタシにハッキリこう言った。「高校生だからって甘えられちゃ困る。オレたちはこれで生活しているんだ。君が自分で決めて芸能界に入った以上しっかり責任を果たしてもらいたい。」

アタシはそういう言葉にドンドン追い詰められていった。

青葉学院は大学までの一貫校だったから、普通にやっていたら系列の大学に進学することは難しいことではない。

ただ、それはあくまで高等部をちゃんと卒業できることが大前提であって、今のまま週に2回程度しか授業にでれないようじゃ推薦どころか高等部の卒業だって危ういのはアタシにだってわかった。

「あの、授業にはちゃんと出たいんですけど……。」

そういうことをマネージャーに言ったこともあった。

しかし彼は

「君も高3だろ？ 女子高生としてのブランドで売れる期間も少しなんだから、我慢してもらえないかな！」

そして最後には「青葉みたいな勉強に厳しい学校じゃなくてもっと仕事に融通の効く学校に転校をすべきだ。」と言い始めた。

「一生懸命勉強してせっかく入れた学校なのに！」  
そう言っただけで抵抗しても

「芸能活動を希望したのは君自身だろ？ もし君が芸能界を途中退場することになったらどれだけ多くの人たちが迷惑するかを良く考えろ。君は元の普通の高校生に戻って何食わぬ顔で過せばいいん

だろっけど、今まで君に投資した資金は全部無駄になり、そして君に関わって仕事をしている人たちはもしかすると仕事をなくしてしまいかもしれないんだよ！」

だからアタシは正直いって少し怖くなっちゃった。

そういう人たちの生活がアタシの肩にかかってしまっているなんて、それまで思ってもいないことだったから。

そしてそんなアタシを救ってくれたのは凜とミコという大切な友達だった。

彼女たちは担任の佐藤優実先生を動かして、事務所の重役である前田さんと話をしてくれた。

そのときはじめてわかったのだが、それは前田さんも寝耳に水の話だった。

前田さんは高校生としてのアタシの立場を尊重するようにマネージャーに指示していたのだけど、マネージャーは独断でアタシの予定を埋めていってしまっていたらしかった。

そして前田さんからマネージャー部長にそのことについて改めて厳しい指示とアタシの担当マネージャーの交代が行われた。

そんなわけでアタシもなんとか卒業と大学推薦に向けての勉強を続けることができた。

そしてアタシたちが大学に進学した年、悟も高校受験で念願の都立戸川高校に入学した。

悟は合格発表から戻ってきてすぐにアタシにそのことをメールで知らせてくれた。

そのときアタシはTVドラマの撮影の真っ最中。

ロケ先で本番前の合間に悟からのメールを見て、アタシはその場で思いっきり飛び上がりたい気持だった。

そのときは撮影でちょうどアタシが大喜びして友達役の女の子に抱きつくシーン。

ただアタシはそれまでどうも上手く感情移入ができずに何回かのNGを出していた。

そして少しの休憩をもらい、これが3回目の本番撮影。

ハイ、本番！

そして

「わぁー！ー！ー！い！ー！よかったねー！」

アタシは慢心の笑みを浮かべて彼女の首に抱きつく。

ハイ、カットオー！

「いいじゃない！ みーちゃん、どうしちゃったの急に？」

監督さんの驚いた表情にアタシはただ照れ笑いをするしかなかったんだ（笑）

そして4年後

アタシは大学を卒業し、悟は慶洋大学の2年生に進級する。

この頃からアタシはドラマの仕事だけでなくCMや映画などでもかなりお仕事が来るようになって、芸能活動もかなり忙しくなっていた。

凜の家に遊びに行ける機会もほとんどなくなり、悟とも電話やメー

ルで時々話すくらい。  
月に2回ほどあるオフの日には疲れて家でグダグダとしてしまっ  
た。

（あーあ、疲れたなあ。　　そういえば悟の声も今月は一回も聞いて  
ないや…。）

カレも今はもう大学2年生。

音楽系のサークルに入ってギターを担当しているなんて話をしてい  
たけど、そういうところじゃ女の子もたくさんいるんだろうし、も  
しかしたらもう彼女なんかできてたりして…。

凜は大学卒業後国連大学に勤め、そしてミコは初等部の先生になっ  
た。

国連大学は青葉の正門前にあるので、2人でときどき一緒に帰った  
りもしているらしい。

（なんか、アタシだけ取り残されちゃってるみたい…。）

そんなことを考えながら

ベッドに身体を横たえてポーッと天井を見上げていたそのとき

ピロロロロ…。

机の上に置いたアタシの携帯電話のメールの着信音が

（んー、誰だろ？）

なんか起き上がってみるのも面倒くさい。

それでもモソモソとベッドから降りて  
どうせ仕事の連絡だろうくらいに思っ  
て着信表示を見ると

『SATORU』の文字

(あ、悟からだあー！)

アタシは滅入った気持が一気に吹き飛ぶような気持になった。

「みー姉ちゃん、今日オフだよネ？  
今ひとりだったなら電話ちよー  
だい。」

アタシは喜び勇んで悟の携帯に電話をした。

「やつほー。悟、ひさしぶりいー！」

「あ、みー姉ちゃん？ 今だいじょうぶなの？」

「ウン。今自分の部屋に一人にいるところだから。悟はどこから？」

「じつはさあ、オレ今みー姉ちゃんの家  
の傍からなんだ。今から

出てこれない？」

「エ、今から？」

アタシは部屋のカーテンの隙間から外を眺める。

最近アタシの周りにも芸能関係の記者が  
いるという噂を聞いていた。見た感じでは  
そういう気配はなさそうだ。

「オツケー！ じゃあ駅前のAngelって喫茶店  
で待ってて？」

アタシはそれからさっそく変装の準備を始める。

よれたジーンズと薄いブルーのシャツに  
着替え、そして髪の毛はひつつめて後ろで  
1つに束ねた。

さらに念には念を、黒の伊達メガネを  
かけてこれで変装完成！

そして注意しながら裏門から自転車で家を出る。

待ち合わせの喫茶店ではすでに悟が奥の方の席に座ってコーヒーを飲んでいた。

手にはタバコを持って煙を燻らせている。

アタシは後ろから近寄り悟の肩に手を置いてこう言った。

「こらあー、キミはまだ20歳前だろー!？」

悟は持っていたタバコを灰皿で消しておどけたようにこう応える。

「ゴメンなさい！ 見逃してくれたらご馳走しますから!」

「よーし。じゃあ、特別に見逃してあげよう!」

「アハハ、みー姉ちゃん。ひさしぶり。」

「ウン。悟、元気そう!」

「急にメールくれるんだもん。びっくりしちゃった(笑)」

「あ、ウン…。」

「どうしたの？ 何かあった?」

すると悟は戸惑ったような表情でいる。

「みー姉ちゃんに言いたいことがあって来たんでしょ？ アタシ、悟のためならできる限りのことするから、言ってみて?」

「ウン。じつはさ、オレ、みー姉ちゃんとはしばらく会えなくなっちゃうかも。」

「エエエッー!」

## 第六話 これがアタシの選んだ道！

「じつはオレ、この前アメリカの大学の留学生試験に合格してさ。」

悟の話を聞くと

凜と悟のお父さんはウエルマートというスーパーマーケットを営んでいるわけだが、以前は都内の20箇所ほどに店舗を持つ地元チェーン店だったのだが、その後は次第に規模を拡大していき今は首都圏に50店舗を展開する中堅クラスになっていた。そのため去年は二部上場も果たすことができたらしい。

凜は将来笹村さんとの結婚が頭にあって、笹村さんは長男でお父さんが貿易会社を営んでいるため将来はその会社を継ぐことを期待されている。

だからそうなる凜の家はやはり長男である弟の悟が継ぐということになる。

順調に成長をしているように見えるスーパー業界も、実際は競争が激しく衰退していく企業も少なくないらしい。そうした中でこれからのウエルマートの将来を考えると、後を継ぐ悟がそうした業界の本場であるアメリカでしっかり勉強してきてほしいのだそうだ。

「留学の期間は2年間で帰ってくるのは大学4年の6月ごろ。そしてその間にとった単位はこっちの大学でも認められるからそのまま卒業できるんだ。」

悟はそう言った。

「じゃあ、2年も悟と会えなくなっちゃうんだねえ…。」「アタシは下を俯いて呟いた。

「でも、ときどきは日本に戻ってくるんでしょ？」

「いや、その大学でオレの入るコースは長期の休暇中は向こうの大きなスーパーで働いて実務を勉強するから…。多分修了まではいきっぱなしになると思う。」

「そ、そうなんだ…。」

2年もいなくなったら、きっと悟はアタシのことなんか忘れちゃうんだろうな。

ああ、なんだろう…。

すごく悲しいヨ…。

泣いちゃいけないって思ってるのに。

泣いたら悟の重荷になっちゃうかな…。

でも、下を向けば涙はポタポタとこぼれてきちゃう。

すると悟はそんなアタシにこう言った。

「それでさ、みー姉ちゃんにお願いがあるんだ。」

アタシはポタポタとこぼれる涙を手で拭って

「なあに？ アタシ悟のためなら何でも…うつく…何でも…。」

「オレが向こうに行ってる間さ、みー姉ちゃんは恋愛禁止ネ。」

「エエエツ…！」

さらに悟はこう続けた。

「いい？ オレがいなくても他の誰とも付き合っちゃダメ！ 彼氏を作っちゃダメ！ デートもしちゃダメだよ！」

「ア、アンタ。アタシのこと一生独身にさせておきたいの？」

「みー姉ちゃん、昔自分のプライベートは全部オレにくれるって言ったじゃん。」

「それは言ったけど……。」

「じゃあ、オレの願い聞いてくれるでしょ？」

「モー、バカ！ 好きになさい（笑）」

それからカレはその1カ月後アメリカへと発った。

カレからは1週間に1回

土曜日の夜12時に必ずメールが来た。

そのメールにはその週に勉強したことやあったこと、そして知り合った友人たちのことが細かく書かれていた。

そしていつの間にか、アタシは土曜日の12時にはほとんど仕事を入れないようにしていた。

それは読んだ後の気持をすぐに悟に返信して伝えたいから。

何回ものメールがアタシたちの間を往復して

アタシが悟と再会したのは、それから2年後の凜と笹村さんの結婚式だった。

悟は帰国の1ヶ月前にアメリカの大学の学位がとれたことをアタシ

に知らせてくれた。

それから1ヶ月間がアタシにとって待ち遠しくって仕方がなかった。悟は凜の結婚式の1週間前に日本に帰国。

しかし数日間は慶洋大学への復学の手続などに追われていたようだった。

そして凜の結婚式当日の朝早く

悟はアタシを家に迎えに来てくれた。

このときアタシはまだ実家に住んではいたが、じつは普段の日は他に都内に事務所名義のマンションを借りていて、「工藤 祥子」という名前でそっちで生活をしていた。

そこは事務所の中の限られた人以外では凜とミコそして悟にしか連絡先を教えていなかった。

朝6時に車に乗ってやってきた悟は、アタシの部屋に来るなり

「みー姉ちゃん。オレ、腹減ったヨー！」

と言う。

「あら、家で朝ごはん食べてこなかったの？」

「ウン。オヤジとお袋と凜ちゃんだけにしてやるうかと思ってさ。」

「お姉ちゃんと一緒の最後の朝ごはんなのに、もったいない。」

「いいんだヨ。オレはみー姉ちゃんに朝ごはん食わせてもらうんだから。」

「フッフ、チヨット待ってて。」

アタシはキッチンでお米を研いでご飯のジャーのスイッチを入れ、その間にお豆腐のお味噌汁と卵焼き、そしてほうれん草の胡麻和えなどを作り、お漬物と味海苔をテーブルに並べた。

アタシが作った朝ご飯を悟が美味しそうに食べている姿。  
なんか夢みたいだな…。

3杯目のお代わりを平らげた後、カレはようやく満足そうに箸を下ろす。

「ハイ、お茶。ドーズ。」

「あ、サンキュー。」

横目で新聞を読みながらお茶を啜る悟を見ると、思わず一人笑いしてしまう。

「フフフ…。」

そんなアタシを見て悟るは

「なんだヨ？ みー姉ちゃん、一人で笑って。」

と不思議そうな顔をした。

そしてアタシは

「なんでもないヨー（笑）」

と応える。

凜の結婚式の開始は11時の予定。

アタシたちは10時まで家の中でノンビリと過ごし、そして悟の車で式場へと向かった。

式場に着くと悟はお父さんたちのところへ、そしてアタシは凜のい



に近くの喫茶店で30分ほどお茶を  
した。

その日、悟はアタシに何か相談があるらしく、先にマンションに行  
っててくれてもいいよと言ったのだけど、アタシたちがお茶をする  
間笹村さんたちと話をしつと待っていてくれたようだった。

「ゴメンねー。遅くなっちゃった。」  
アタシは凜たちと分かれた後、喫茶店から少し離れた通りで悟が待  
つ車に乗り込む。

悟はこの日は車を運転するためずつとお酒を控えてくれていたらし  
い。  
そして夜9時半ごろ、アタシたちはマンションの部屋へと戻ってき  
た。

アタシは隣の部屋でドレスから普段着へと着替え、そしてキッチン  
でお湯を沸かしてコーヒーを入れた。

「ハイ、悟ー。コーヒー入れたヨー。」  
そう言つてアタシはダイニング中央に置かれた小さなガラスステーブ  
ルの上にそれを置く。

「あ、サンキュー。」  
アタシも悟の横に腰を下ろした。

悟はコーヒーを啜り、ふうっと小さなため息をつく。

「凜、とうとうお嫁に行っちゃったネー。」

「あ、ウン。」

「チョット寂しい？（笑）」

「いんやー、ぜんぜん。」

「無理してない？」

「してないヨー。だって、凜ちゃんは凜ちゃんだしね。」

「そう？」

「ウン。そして…。」

「そして？」

「オレはオレだもん。」

悟はそう言っただけで、すぐアタシのほうを見た。

「みー姉ちゃん、2年間ちゃんとオレの言ったこと守った？」

「守ったヨー。だって、そうしないとまた悟ったら拗ねちゃうもん

（笑）」

「ウン。」

「まったくアタシは、アタシをずっと自分のお姉ちゃんのままにしておきたいんでしょ？（笑）」

アタシはそう言っただけで笑おうとした。

すると悟は

「違うヨ。」

「エ？」

「美由紀はオレのものだもん。」

「エ…。」

悟がアタシのことを美由紀って…呼んだ。

初めて  
アタシのことを。

お互い目と目がまっすぐとつながって  
そしてアタシたちはほとんど無意識に、  
それは吸い寄せられるように  
お互いの唇を重ねあったんだ。

そして

カレはそれだけでは終わらせようとしなかった。

カレはキスをした舌先をアタシの首筋に這わせてきた。

「チヨ、チヨット…さと…る…。まって…。」  
「なんで？」

「だって、アンタはアタシの友達の前なんだ…ヨ。」  
「それは単なるきっかけじゃん。凜ちゃんは凜ちゃん、オレはオレ  
ってさっき言ったでしょ？」

「だ、だって、ああ、アタシ、アンタより3歳も年上…ああ…。」  
「学年なんて人間が勝手に決めたことだからあんまり意味ない。」

そしてカレはアタシのシャツを上にもたせかしてしまふ。  
そのとき下にキャミソールをつけていないアタシは即ブラジャーの  
状態。

悟はそのブラすら背中の中のホックをパチンと外してしまふ。

「さ、悟。みー姉ちゃん、恥ずかしいヨォー。」

「フフフー、もうみー姉ちゃんじゃないの。美由紀はオレの女だ

もん。」

「悟〜。」

わあああー！ー！ー！

悟がアタシの胸を舐めてるううー！ー！

あの可愛かった悟がアタシのおっぱい吸ってるヨオオー！ー！

ときどき上の方に這い上がってきては、カレはアタシの唇に自分の唇を重ね合わせる。

そうするとアタシの胸の奥の方で何かが締め付けられるような、すごく切ない気持が湧き上がってくる。

「はあ、はあ、ああ、悟、悟ー！ー！ー！」

そして、カレの手はいよいよアタシのスカートのホックにも手をかけてしまう。

ショーツを脱がされたとき、アタシはホントに恥かしくて涙が湧いてきた。

「美由紀ははじめて？」

悟がアタシにそう聞いてきた。

「当たり前じゃん！　だって、アンタがアタシに他の男を近寄らせなかったんでしょ？」

「そっか。ならお互い初めて同士だね？」

「エ、そうなの？」

「ウン、だってオレ昔からずっと美由紀だって決めてたもん。」  
そう言っつて悟はあたしの目をまっすぐ見る。

ああ、もうダメだあー。  
アタシ、もう何をやっても悟には逆らえないー。

観念したアタシは身体力を抜いてくたつとなってしまう。  
悟はそんなアタシを抱いてベッドの上に降ろし、そしてギュッと抱きしめて覆いかぶさってきた。

(いっつ、いたあーいっつ！)

ぐりぐりの中に押し入ってくる悟のアレ。

「さと…る。ゆっくり…、もっとゆっくり…。」  
しかしどうもアタシのそんな悲痛な叫び声はカレの耳にはあまり入っていない様子で

ああ、でも下は痛いけど

悟に抱かれて肌を合わせている感じはなんか心地良い。

それでも

ボーっとする頭の中で何かを忘れている気がする…。

(エ、あ…そ、そうだ。この子、今アレつけてない…)

悟がベッドでアタシの身体を降ろしてそういうものを着けた様子になかった。

また今から着けるにしても、処女のアタシがそんなものを用意しているはずもない。

「さ、悟。あの…。」

「エ、なに？今、オレ忙しいんだけど。」  
悟はそう言ってアタシの身体にしがみ付いて腰を前後に動かし続けている。

（エツト、この前アレ来たのいつだったっけ？）

（あれから、エツト、エツト…12足して、エツト…。）

（あー、もう考えられない！）

そうしている間に悟の息が段々荒くなってきた。

「み、美由紀。 オレ、もう、もう…。」

（このままがいい。悟のをアタシの中に受け入れたい。）

アタシは悟の身体にしがみ付いて言った。

「いいヨオ。 悟、おいで。 アタシの中においでえええー！  
！」

そしてカレはアタシの中で果てた。

終わった後、カレはアタシの身体の上にくたつと乗ったままじつとしてる。

アタシはそんなカレの身体の重さがすごく心地良かった。

最終話 みーちゃんと悟の場合（未完成 明日仕上げ）

それからしばらくアタシはドキドキしながらときを過した。

（もしも妊娠しちゃったら。。。）

（悟はまだ大学4年生、結婚なんてとても考えられる年齢じゃない。  
）  
（でも、もし赤ちゃんができたとしたら、アタシは…悟の子をおろすことなんて絶対にできない。）

次の予定日にちゃんと生理が来たときはアタシはホッと胸を撫で下ろした。

しかしそれからの悟はけっこう頻繁にアタシのことを求めてきた。それもアタシと会うまでの間は男の人のそういう我慢をしてくるので、会えば一気にそれを爆発させてしまい、2回、3回は当たり前前状態（笑）

月に2回のオフの日には、必ず悟はアタシのマンションへとやって来て、そしてアタシは彼に抱かれる。

ただしさすがに自分でも考えたのか、その後はしっかりとアレを買ってきてアタシの家に備え置いていた。

マンションでセックスをして、そして悟はアタシが作ったお夕飯を食べて家に帰っていく。

カレがいる間はすごく幸せ

でも、カレが帰った後の部屋の中は寒くってとても寂しい。

そんなことが半年ほど続き、悟はいよいよ大学を卒業する。

悟は卒業後にそのままお父さんの経営するウエルマートに入社した。ただしカレのお父さんはそんな悟に対しても特別扱いはいしない。

カレは入社後は都内にある店舗の平社員としてスタートを始めた。

アタシは何度かカレが働いているところを見に行ったことがあった。

カレは朝早くから出社して、そして店舗前の掃除から始める。

そしてアルバイトに混じって商品の陳列を行い、レジの手が足りないときには積極的にレジ打ち入り、夜になってから売上の集計をして、その後明日の特売予定の確認。

仕事が終わるのは毎日8時を過ぎたころだった。

そして悟がウエルマートに入社して1年が過ぎようとしたときカレはいつものようにオフ日の前夜にアタシのマンションに泊まりに来た。

アタシはなるべくカレの疲れが溜まらない様にと、予め夕飯の用意をしてそしてお風呂の準備をしておく。そして、一緒に夕飯を済ませ、アタシがいつもベッドの横の引き出しに入っている避妊のためのアレを確認しようとするところとちょうど切れてしまっていた。

「あれ、もうなくなっちゃってる。 どうしよう…。」  
アタシがそう呟くと悟は

「あ、今日はいいんだ。 それよりチョット外に出ないか？」

「いいけど…。 もう10時でどこ行くの？」

「渋谷。」

そしてアタシたちは悟の車で夜の渋谷の街へと向かった。

「さあ、着いたヨ。」

そこは昔アタシが田所君と映画に行ったとき悟とバッテリー会ったシネマホールの隣にある喫茶店だった。

「あれ、ここって。」

「そう、覚えてる?」

「ウン。でもなんで?」

「オレさあ、あのとき美由紀と怪物くんの映画観た後、この喫茶店に連れてきてやる予定だったんだ。」

「そうだったんだ?」

「ウン、まあとりあえず入ろう。」

お店の前の看板を見ると、その喫茶店は深夜の12時まで営業をしているらしい。

アタシたちは窓際の席に着くと、悟はウエイトレスさんの持ってきたメニューを手に取る。

「ここはケーキが美味いらしいんだ。美由紀の分もケーキもオレが選んでいい?」

「あ、ウン。いいけど...。」

悟はウエイトレスさんにケーキの名前を口出さず、メニューの中から指を指して

「これを2つ。それとホットコーヒー。」  
とだけ言った。

そしてしばらくしてそのウエイトレスさんが持ってきてくれたのは

チヨコがたつぷりとかかった生チヨコケーキ。

「悟、これ…。」

「美由紀がいつもオレのために買ってきてくれただろ？ オレも美由紀にこれをご馳走してやりたかったんだ。」

「悟うう…。」

嬉しい…。

あのときの悟の気持をアタシにちゃんと言ってくれるなんて。

すると悟はアタシの前に小さな箱を取り出してこう言った。

「でも、あのときはケーキだけだったけど、今日はもうひとつある。」

「

「エ、なんだろ？」

アタシは悟が取り出した小さな箱を開けると

そこには可愛いプチダイヤのついた指輪が入っていた。

「さ、悟、これ…。」

「まだ新入社員だからな。大したものはあげられないけど、一応プロポーズのつもりなんだけど…。」

「いいの？ アタシ、これもちゃって…。」

「当たり前だろ。オレ、あのときからずっと美由紀にいつかこれをあげるつもりだったんだぜ。」

「嬉しい、嬉しいヨオ…。悟、嬉しいヨオー…。」

ああ、涙が溢れてきて止まらない。

アタシ、きつと初めて会ったときからずっと、ずっと悟にこう言ってもらえるのを待ってたんだって、いまやっとわかったヨ。

それからアタシたちは色々なことを話し合った。

悟はアタシが芸能界を続けることに反対はしなかったが、それでもアタシは最終的には自分で引退を決断した。

アタシが芸能界に入るときに事務所の前田さんは、何かを得る代わりに何かを失う覚悟を話してくれた。ならば、アタシはカレに愛情を尽くすことを選びたい。そのために失うものがあってもカレとの生活のほうがアタシにはずっと大切だからだ。

だから前田さんはアタシに自分で本当に大切だと思うほうを選ばないと言ってくれたんだ。

アタシはそれから3日後にその決心を前田さんに伝えた。

前田さんは多くを言わず、アタシの気持をそのまま受け入れてくれた。

ただし、今すぐ結婚というのは難しい、あと1年待つてほしいことも言われた。

このときアタシはCM3本、そして主演ドラマを1本とレギュラー番組ももっていた他、2カ月後に大きな役での映画撮影の仕事も予定に入っていた。

だから、そうした予定がすべて終わってからの結婚という約束になった。

それからまずアタシと悟はそれぞれの家に結婚の承諾をもらいに行く。

凜のお母さんは、うすうすアタシたちのことを気付いていたらしかった。

芸能人という存在であるアタシよりも娘の友達として家にしょっちゅう来ていたアタシを見てくれて、お母さんもお父さんも心から祝福してくれた。

一方でウチの家のほうがアタシには心配ではあったのだけど、これはかなり意外な結果になった。

アタシのウチは弟が小さいときに亡くなってしまったので、アタシが一人っ子ということになり家を継ぐ者がいなくなってしまう。それをアタシは心配していた。

ところがウチの両親は

「まあ、ウチは元から分家だしな。そんな家を継ぐとかどうとかあんまり気にしてないから。」

「家のことは気にしないで好きな人と一緒になりなさい。」

こうしてお互いの家のことも問題なくなり、アタシはあとは残った仕事をしっかり終わらせることを頑張ることとなった。

その後、事務所からアタシの結婚について正式な発表が行われた。ただし、結婚相手が芸能界とは関係のない一般人のため、その相手の素性については当面控えさせてほしいということになった。

そして2カ月後

アタシにとっていよいよ芸能界最後となる映画撮影がクランクイン

した。

この映画は戦前から戦後にかけて女子教育に一生をささげた女性の物語で、アタシはかつてその教師の教え子で卒業後その学校の女教師となるという役だった。

アタシはこのとき26歳。

そしてそのアタシの勤める学校で事務職員を勤める女性の役に22歳の神林うなという女の子が選ばれた。

彼女は20歳のときにグラビアタレントとしてデビュー、その後はわりとズケズケと物事を言うイメージを生かしてバラエティを中心に活躍し始めた娘だった。

ただあまり周りの人の気持に気を使わないところがあって、番組の中での衝突も少なくないという話も聞いたことがあった。

あるとき

撮影の合間の休憩時間

彼女はアタシにこんなことを言ってきた。

「ねえ、佐倉さん、エンゲージリングってどんなのをもらったんですかー？」

「エー、どんなのって言われても…（笑）」

すると彼女は

「みたーい！ ねえ、今度持ってきて見せてくださいヨー。」  
とアタシにねだった。

じつはアタシは悟からもらった指輪は、いつも自分のそばに置いて

おきたいバッグの中にしまってた。そしてそれをときどき取り出しては指にはめてニヤニヤとしてしまう。

「ウーン、見てみたい？」

アタシは彼女にそう尋ねると

「あ、今持ってきてるんですか？ だったら、見せてくださいヨー。」

「

そこでアタシはバッグからその指輪の箱を取り出して彼女の前で蓋を開けて見せた。

すると彼女は

「エ、これ？ エンゲージリングですか？ なんかこのダイヤすごく小さくないですか？ もっと大きなのが付いたのをもらえばよかったのにー。」

63

そのとき

アタシは

プチーーンと

キレた。

さすがに

「ア、アンタ！ こ、この指輪はね、カレが朝から夜遅くまで一生懸命働いたお金でアタシに買ってくれたものなんだッ！ アタシにとっては一億円のダイヤなんかよりずっとずっと価値があるものなんだー！」

と叫んだ。

周りにいる人たちが一斉にアタシたちの方に振り向く。

するとその娘は

「エ、なんでそんな熱くなっちゃってるの？　なんかつまんなーい。  
」とその場から逃げていってしまった。

本番を前にして周りの空気が一気に重くなってしまった。

これは映画に関わる者として絶対にしてはいけないことのはずだった。

アタシはその場でしゃがみ込む。

アタシの大切な指輪を馬鹿にされた悔しさから涙がどうしても止まらない。

そのとき

主役の教師役を務める京橋桐子さんがアタシに近づいてきた。  
彼女は芸能界でも一にを争う名女優で大先輩。

アタシみたいな8年程度のキャリアなんか比較にならない存在。

（お、怒られるー。）

アタシは一瞬目を閉じて身体を竦めた。

すると京橋さんはアタシの肩に手を置きこう言った。

「佐倉さん、アタシにもその指輪見ってもらっていいかな？」

アタシは恐る恐る指輪を差し出す。

彼女はアタシの指輪を大切そうに手にとって眺め、

「ウン。これはとてもステキな指輪ネ。この指輪を見るとカレの  
アナタに対する愛情がよくわかるわ。アナタ、きつと幸せになれ  
るわヨ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2203z/>

---

弟以上恋人未満（みーちゃんと悟の場合）

2011年12月11日03時56分発行